

明治24年版『改正増補 哲学字彙』の可能性

Another edition of Dictionary of Philosophy published in 1891

真田 治子

SANADA, Haruko

明治期の学術用語集『哲学字彙』は初版（1881年）・改訂増補版（1884年）・英独仏和版（1912年）があるが、これまで英独仏和版成立過程の詳細はあまり知られていない。英独仏和版の主たる著者である井上哲次郎は、自身の日記（「巽軒日記」）に哲学字彙の編纂に関する記録を残している。1891年ごろには『哲学字彙』改訂増補版の「再版」を知らせる広告が雑誌に数回掲載されており、先行研究で「複数の版種がある」とされた『哲学字彙』改訂増補版には、1884年版の他に1891年版が存在する可能性が高くなった。東京大学所蔵の『哲学字彙』の1冊は、共著者である元良勇次郎の旧蔵本である可能性が高いこともわかった。この本には書き込みがあり、英独仏和版の編纂に用いられた可能性がある。これらの資料相互の位置づけを通して英独仏和版の成立過程を考察する。

1. はじめに

「物理」「法律」「社会」「心理」など現代の社会には欠かせない漢語の中には、幕末・明治初期に西欧から概念がもたらされ、それに漢字をあてることによって新しい語として導入されたものも多い。これらの語は様々な経過をたどって現代日本語の中核部分に入っているが、その重要な通過点の一つとして、明治期の哲学者井上哲次郎らによって編纂された学術用語集『哲学字彙』がある。この辞書は、哲学の範囲に留まらず多くの学術用語や抽象的な漢語を近代日本語に定着させたものと考えられている（飛田1979、1980）。

『哲学字彙』には初版、再版にあたる『改訂増補 哲学字彙』^(註1)、三版にあたる『英独

仏和 哲学字彙』（井上他1881、1884、1912）（以下各々初版、改訂増補版、英独仏和版とよぶ）の3つの版があり、いずれの版も井上が編纂に関わっている。改訂増補版と英独仏和版との間には28年もの間があいているが、『哲学雑誌』に掲載された記事や広告から、1891（明治24）年頃に、1884（明治17）年に刊行された改訂増補版の「再版」が出版された可能性があることが筆者の調査で判明した。また共著者の元良勇次郎が英独仏和版の編纂に使っていたと思われる書き入れ本もみつかった。内容に関する詳細な比較調査はまだこれからであるが、今回は資料相互の位置づけを考察したい。

なお年代は西暦で示したが、明治・大正時代については和暦も併記した。

キーワード：井上哲次郎、元良勇次郎、哲学字彙、懐中雑記、巽軒日記
Key words : Tetsujiro Inoue, Yujiro Matora, Dictionary of Philosophy, Kaichu Zakki, Sonken Nikki

2. 『哲学字彙』について

初版は1881（明治14）年に東京大学三学部から出版された。初版の緒言からFlemingの哲学用語集を底本としたことがうかがえるが、その後の研究では井上らが人文・社会・自然科学と広い範囲にわたって用語を補ったと推定されている（飛田1980）。『哲学字彙』初版が約2年で売り切れたあと井上と後輩の有賀長雄が初版の訂正と若干の増補を行ったが、井上がドイツに留学することになったため、有賀が1884（明治17）年に東洋館から「改訂増補」という語を書名の上につけて改訂増補版を出版した（飛田1980）。近年の研究によって、この改訂増補版には複数の版種があることがわかっている（飛田2005）。

初版と改訂増補版の書式上の主な特徴は、西欧語（主に英語）の用語がABC順に配置され、対応する訳語（主に漢語や漢字を用いて音訳した字音語）が複数あること、意味記述がないことである。つまり「字彙」という表題がつけられているが、内容は対訳用語集の体裁をとっており、外国語辞書の影響を受けた、意味や用法の解説を伴う近現代の辞書の書式とは異なり、例えば『英和对訳袖珍辞書』のような近世の辞書の形態に近い。英独仏和版は、1912（明治45）年に丸善から出版された。欧文見出し語と対応する漢語が並べられ、意味記述がない点は初版・改訂増補版と同様であるが、見出し語は英語・独語・仏語の三か国語がすべて必ず表記され、語によってはラテン語・ギリシャ語が付加されているものもある。初版の見出し語やその訳語を含みながらも数倍の分量の辞書になっている。この英独仏和版は同じ体裁・内容でさらに1921（大正10）年に改訂増補版が出版され

ている。後年の研究では英独仏和版は初版ほどの影響力はなかったと考えられている（陳2001）。

3. 元良勇次郎旧蔵本の存在と井上哲次郎旧蔵本との関係

陳（2001）によれば、東京都立中央図書館には井上哲次郎旧蔵の『改訂増補 哲学字彙』がある。この本には井上自身のものと思われる書き入れがあり、『英独仏和 哲学字彙』の編集に用いた可能性がある。現在、突き合わせ作業を進めているが、すべての書き入れが『英独仏和 哲学字彙』に反映されている訳ではないようである。

今回、調査の過程で、東京大学総合図書館所蔵の『哲学字彙』（初版）（請求番号B10:214）と『改訂増補 哲学字彙』（請求番号B10:215）は、英独仏和版の共著者で、帝国大学の心理学の教授であった元良勇次郎旧蔵本の可能性が高いことがわかった。

この2冊は改装されているが、どちらも1915（大正4）年5月31日の図書館受入と思われるスタンプが押されている。

初版（請求番号B10:214）は中の遊び紙に「*To my dear friend K. Shimomura,*（改行）*With the best wishes of*（改行）*This book belongs to Y. Sugita.*（改行）*power of nation must be*（改行）*centralized. Apr. 2, 85*」（下線ママ）という書込と「Y. MOTORA.」のスタンプが押されていた。元良の結婚前の旧姓杉田であるので、Y. Sugitaは元良自身のことと思われる。また元良は同志社英学校の1期生であったが、2期生には熊本洋学校から転入した下村孝太郎がいるので、K. Shimomuraは下村孝太郎ではないかと思われる。元良は1883（明治16）年に渡米し、1888（明治21）

年までの間、ボストン大学及びジョンズ・ホプキンス大学に在学した（佐藤2002）。一方、下村も1885年に留学のため渡米し、のちにジョンズ・ホプキンス大学で学んでいる。遊び紙の書き込みは最初の2行に取り消し線が引かれ、3行目前半の「*This book belongs to*」の部分は上の2行と若干筆勢が違うことから、一旦は下村に渡した本が元良の元にもどったようにも読みとれる。中にはAの部にわずかに書込がある。

改訂増補版（請求番号B10:215）の方は、後述する改訂増補諸版（飛田2005）のうち、奥付に印のない版である。赤鉛筆・黒インクなどで随所に書き込みがあり、製本によって上部の書き込みが若干欠けている箇所もある。CosmosとCostの間の箇所には「stop Dec. 22 / 93」とあり、1893（明治26）年12月22日に作業の中断を記したのではないかと考えられる。

この2冊について東京大学総合図書館に問い合わせたところ、この2冊は和書の登録番号で2番違いになっており、図書原簿『大正12年 焼残本（和書）』には前後約300冊が連続番号で記録されていること、そのうちの一部の図書の表紙裏に「元良信太郎寄贈、故文学博士元良勇次郎氏記念図書」という寄贈票が確認されたと回答があった。2冊の『哲学字彙』は改装されており寄贈票は確認できないが、元良信太郎氏は元良勇次郎の長男であるので1912（大正12）年12月13日に元良勇次郎が逝去した後、遺族が寄贈した本であろう。

書込は見出し語や訳語の加筆・修正に集中しており、勉強のための書込とは考えにくい。1893（明治26）年12月22日の書き入れ日付からみて、この時期にすでに英独仏和版の基礎となる改訂作業が進められていたと考えられ

る。

4. 井上哲次郎主催「哲学字彙の会」 — 異軒日記における記述

井上哲次郎の欧州留学後の日記「異軒日記」（東京大学所蔵84冊・文京区立小石川図書館所蔵3冊）には、面談した人物の氏名、書簡をやりとりした人物の氏名などの他に、井上の日々の動向も細かく記録されている^{（註2）}。

この「異軒日記」の中には、哲学字彙の改訂作業に関わるとされる記載が見られる。最も古い記述は1901（明治34）年1月12日条の「哲学字彙会を開く」というもので、「開く」という表現から井上哲次郎主導で行われたのではないかと考えられる。参加者の人名は全く記されていない。記述は途中から「赴く」「蒞む」という語に変わっているが、これが井上の立場の変化を示しているかどうかは不明である。この会は確認できる限りで、1910（明治43）年12月7日条まで51回記録されている。ただし、1911（明治44）年1月～6月の日記は現存しないので、実際はこれより多かった可能性もある。

「哲学字彙の会」は開催時期に波があり、中断していた時期もあったようである。多くは水曜の午後、教授会の後などに月2回程度開催されている。1904（明治37）年9月から翌10月まで1年余の期間は、元良が外遊のため不在にしており、この間は「哲学字彙の会」は開催されていない。しかし、中島力造が1909（明治42）年7月から1年間外遊した時期には、「哲学字彙の会」は頻繁に開催されている。中断の理由は日記には書かれていないが、井上哲次郎が元良勇次郎と個人的に非常に近い関係であったことを考えると、元良の外遊も中断の一因かもしれない。

1911（明治44）年7月からは主に丸善との校正のやりとりが記録されている。校正が井上だけで行われたのか、共著者である元良勇次郎・中島力造と分担、協力して行われたのかも日記には記述がない。また1911（明治44）年11月19日条には丸善との間の契約書の記述、同年12月には英文序文執筆の記述がみられる。1912（明治45）年1月には丸善から『英独仏和 哲学字彙』が届き、これを元良勇次郎と中島力造に届ける様子が記録されている。この記述から丸善との折衝は井上哲次郎を中心に行われたと考えてよいであろう。

1912（明治45）年1月14日条には、『哲学字彙』の広告文を丸善に送ったとの記述もある。記録の初期には、1905（明治38）年2月に丸善に入稿する記事、1908（明治41）年10月には校正が出たという記事があるが、これらと1911（明治44）年下半期の校正とがどのような関係になっていたかは不明である。奥付の検印のやりとりから『英独仏和 哲学字彙』は当初1,000部印刷されたと思われる。1921（大正10）年には再度、奥付をやりとりする記述があり、この時は再版200部が刷られたようである。

表1 井上哲次郎の日記における『哲学字彙』関係の記述

1901（明治34）年1月	12日条 哲学字彙会を開く
1903（明治36）年11月	25日条 哲学字彙の会を開く
1905（明治38）年2月	27日条 哲学字彙の原稿第一冊を丸善に付与す
1908（明治41）年3月	18日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く
1908（明治41）年5月	27日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く
1908（明治41）年6月	3日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く、10日条 ○午後、教授会に出で、尋いで哲学字彙の会を開く
1908（明治41）年10月	8日条 午前、丸善より哲学字彙の校正を送来る
1908（明治41）年12月	22日条 ○哲学字彙の会に大学に赴く、24日条 ○哲学字彙の会に大学に赴く
1909（明治42）年1月	13日条 ○午後、大学に哲学字彙の会に赴く
1909（明治42）年2月	17日条 ○哲学字彙の会を催ふす
1909（明治42）年5月	19日条 ○午後、文科大学教授会に大学に赴く、尋いで哲学辞彙（ママ）の編纂会に蒞む
1909（明治42）年6月	28日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く、30日条 ○午後、大学山上御殿に赴き、尋いで（ママ）哲学字彙の会に蒞む
1909（明治42）年7月	5日条 ○哲学字彙の会に心理学研究室に赴く、7日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く、12日条 ○哲学字彙の会に赴く、19日条 ○哲学字彙の会に大学に赴く
1909（明治42）年9月	18日条 ○哲学字彙の会に大学に赴く、26日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く
1909（明治42）年10月	2日条 ○哲学字彙の会に大学に赴く、23日条 午前、哲学字彙の会に大学に赴く
1909（明治42）年11月	10日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く、17日条 ○午後、教授会に赴く、尋いで哲学字彙の会に蒞む、24日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く
1909（明治42）年12月	1日条 ○午後、教授会に山上御殿に赴く、尋いで哲学字彙の会に蒞む、8日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に行く、15日条 ○午後、教授会に山上御殿に赴く、尋いで哲学字彙の会に蒞む、25日条 ○哲学字彙の会に大学に赴く
1910（明治43）年1月	12日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く、26日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く
1910（明治43）年2月	2日条 ○哲学字彙の会に蒞む、9日条 ○午後、山上御殿に赴き、尋いで哲学字彙の会に蒞む、16日条 ○哲学字彙の会に蒞む、23日条 ○午後、哲学字彙の会に、大学に赴く

明治24年版『改正増補 哲学字彙』の可能性

1910 (明治43) 年3月	2日条 ○午後、教授会に大学に赴く、尋いで哲学会に(筆者注・訂正跡)字彙会に蒞む、9日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く、16日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く、23日条 ○午後、文科大学教授会に赴く、尋いで哲学字彙の会に蒞む
1910 (明治43) 年4月	13日条 ○午後、教授会に大学に赴く、尋いで哲学字彙の会に蒞む、27日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く
1910 (明治43) 年5月	18日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く、25日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く
1910 (明治43) 年6月	1日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く、9日条 ○哲学字彙の会に大学に赴く、22日条 ○午後、点数会議及び教授会議に山上御殿に赴く、尋いで哲学字彙の会に蒞む、25日条 ○哲学字彙の会に蒞む、30日条 ○哲学字彙の会に大学に赴く
1910 (明治43) 年7月	7日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く
1910 (明治43) 年10月	19日条 ○哲学字彙の会に赴く
1910 (明治43) 年11月	2日条 ○哲学字彙の会に蒞む
1910 (明治43) 年12月	7日条 ○午後、哲学字彙の会に大学に赴く
	(1911 (明治44) 年1月～6月 日記欠落)
1911 (明治44) 年7月	3日条 ○哲学字彙の校正をなす、4日条 午前、哲学字彙の校正をなす、4日条 ○午後、哲学字彙の校正をなす、4日条 ○校正を丸善に送る、4日条 ○校正を丸善に送る、5日条 ○哲学字彙の校正をなす、7日条 ○校正を博文館及び丸善に送る、9日条 ○丸善より校正来る、9日条 ○校正を丸善に送る、11日条 ○校正を丸善に送る、11日条 ○夜、校正を丸善に送る、14日条 ○丸善より校正来る、14日条 ○校正を丸善に送る、19日条 ○丸善より校正を送来る、19日条 ○夜、校正を丸善に送る、20日条 ○丸善より校正来る、20日条 ○哲学字彙の校正をなす、21日条 ○哲学字彙の校正をなす、21日条 ○夜、哲学字彙の校正をなす、23日条 ○夜、校正を三省堂と丸善に送る
1911 (明治44) 年9月	2日条 ○「哲学字彙」の校正をなす、2日条 ○夜、引続き「哲学字彙」の校正をなす、3日条 ○「哲学字彙」の校正を丸善に送る、9日条 ○「哲学字彙」の校正をなす、9日条 ○夜、(中略)「哲学字彙」の校正をなす、10日条 ○「哲学字彙」の校正をなす、10日条 ○午後、引続き「哲学字彙」の校正をなす、11日条 ○夜、「哲学字彙」の校正をなす、12日条 ○校正を丸善及び博文館に送る、14日条 ○夜、「哲学字彙」の校正をなす、15日条 ○丸善より校正来る、15日条 ○夜、「哲学字彙」の校正をなす、16日条 ○夜、「哲学字彙」の校正をなす、19日条 ○「哲学字彙」の校正をなす、19日条 ○夜、校正を丸善に送る、19日条 ○引続き校正をなす、22日条 ○「哲学字彙」の校正をなす(ママ)、23日条 ○「哲学字彙」の校正をなす、26日条 ○丸善より校正来る、28日条 ○夜、哲学字彙」の校正をなす(ママ)、29日条 ○哲学字彙の校正をなす、29日条 ○夜、(中略)引続き哲学字彙の校正をなし、之を丸善に送る
1911 (明治44) 年10月	1日条 ○丸善より校正来る、7日条 ○(中略)丸善等より来状、14日条 ○丸善より校正来る、17日条 ○「哲学字彙」の校正をなす、17日条 ○午後、(中略)「哲学字彙」の校正をなす、19日条 ○「哲学字彙」の校正をなす、19日条 ○夜、(中略)「哲学字彙」の校正をなす、20日条 ○「哲学字彙」の校正をなす、20日条 ○校正を丸善に送る、22日条 ○校正を丸善に送る、29日条 ○丸善より来状
1911 (明治44) 年11月	7日条 ○丸善より来状、9日条 ○哲学字彙の校正をなす、9日条 ○夜、(中略)哲学字彙の校正をなす、10日条 ○校正を丸善に送る、18日条 ○哲学字彙の校正をなす、18日条 ○夜、哲学字彙の校正をなす、19日条 ○丸善より契約書を送来る、

	22日条○丸善より校正来る、23日条○丸善より校正を送来る、23日条○丸善及び活版所より来状、23日条○哲学字彙の校正をなす、24日条 午前、校正を丸善に送る、25日条○丸善及び日比谷図書館より来状、26日条○丸善より校正来る、26日条○丸善より来状、26日条○校正を丸善に送る、28日条 午前、丸善より来状、28日条○「哲学字彙」の校正をなす、28日条○夜、引続き「哲学字彙」の校正をなす、29日条○「哲学字彙」の校正をなす、29日条○夜、引続き「哲学字彙」の校正をなす、29日条○校正を丸善に送る、29日条○再び校正を丸善に送る
1911（明治44）年12月	2日条 午前、丸善（中略）より来状、2日条○「哲学字彙」の英文序文を作る、2日条○午後、引続き英文序文を草す、2日条○夜、英文序文を草し了る、3日条○元良勇次郎を訪ふ ^(註3) 、4日条○英文序文を中島力造に送る、5日条○午後、丸善より校正来る、5日条○丸善に校正を送る、7日条○丸善より校正来る、7日条○丸善に校正を送る、8日条○（中略）丸善店員来訪す、13日条○英文序文を丸善に送る、15日条○丸善より校正来る、16日条○丸善より校正済の分を送来る、17日条○丸善より校正来る、17日条○校正を丸善に送る、19日条○丸善より校正来る、19日条○校正を丸善に送る、25日条○丸善より摺替分を送来る、26日条○丸善より哲学字彙の見本と奥附とを送来る、26日条○夜、「哲学字彙」の奥附五百部の奥附を丸善に送る（ママ）、28日条 午前、丸善より来状、31日条○茲に歳末に際し過去一年間の事を瞥見するに（中略）哲学字彙……五〇〇（筆者注・部数を示す）
1912（明治45）年1月	7日条○丸善より「哲学字彙」二十部を送来る、7日条○英爾を遣はして哲学字彙を壱部元良勇次郎に送る、9日条○「哲学字彙」を清子に托して吉田熊次及び姉崎正治に送る、10日条○哲学字彙を二部大学図書館に寄附し、藤岡勝次、中島力造及び大槻快尊に各壱部を付与す、10日条○丸善より来状、13日条○丸善より来状、14日条○広告文を丸善に送る、14日条○「哲学字彙」を加藤弘之に送る、15日条○夜、加藤弘之より来状、25日条○「哲学字彙」三百部の奥附を丸善に付与す
1912（明治45）年2月	13日条○「哲学字彙」を中島徳蔵に送る、19日条○午後、「哲学字彙」式百部の奥附を丸善に付与す、24日条○哲学会より哲学雑誌三百号記念号を送来る
1912（明治45）年12月	31日条○茲に歳末に際し過去一年間の事を瞥見するに（中略）哲学字彙……一〇〇〇（筆者注・部数を示す）
1921（大正10）年3月	6日条○丸善（中略）等より来状
1921（大正10）年4月	8日条○（中略）丸善（中略）等より来状、16日条○「哲学字彙」二百部の奥附を丸善に送る

5. 『哲学字彙』の広告を掲載した『哲学雑誌』の概要

このほか「巽軒日記」には、井上哲次郎が哲学会で活動していた様子も書かれている。今回の調査で、この哲学会が発行している『哲学雑誌』に『哲学字彙』の出版広告が掲載されていることが判明した。

発行母体である哲学会は、井上円了、井上哲次郎、有賀長雄、三宅雄二郎、棚橋一郎等

の発案により1884（明治17）年1月26日に設立された。加藤弘之、西周、西村茂樹、外山正一等が加わり、会員29名で発足したという（東京大学百年史編集委員会1986）。初代会長は加藤弘之、副会長は外山正一である。毎月例会を行い、1887（明治20）年2月からは機関誌『哲学会雑誌』を月刊で発行するようになる。当初の発行元は哲学会事務所、発売元は哲学書院であったが、7冊64号（1892（明治25）年6月）から『哲学雑誌』に名称を変

更し16巻178号（1901（明治34）年12月）までは哲学雑誌社が発行している^(注4)。それ以後の発行元は金港堂書籍、岩波書店などが引き継ぎ、現在は有斐閣が年刊で出版している。哲学書院は井上円了が創設した出版社で、哲学会事務所は哲学書院内に住所があることから、機関誌発行の初期には井上円了が運営面や資金面などで大きく貢献したと推測される。

哲学会は直接大学の機構に属する組織ではない（東京大学百年史編集委員会1986）とされているが、内容面をみると『哲学雑誌』（以下前身の『哲学会雑誌』を含む）は帝国大学哲学科の卒業生の題目一覧を掲載したり、ある学期の専門科目の授業名と担当教員の一覧を掲載したりしており、事実上、帝国大学哲学科の雑誌と考えられる。戦前の毎号の構成は初期からほとんど変わらず、論説2～3本に加え、「雑録」「記事」「彙報」など時期によって名称が異なるが、毎月の例会の報告や哲学科の動向、会員の留学・帰朝など細かな動向が報告されている。このほか新刊紹介や欧文の哲学関係の雑誌記事の紹介などもある。また留学中の学会員の報告として、特にドイツとフランスの各地の大学の教授の異動や開講科目が掲載されている。この哲学会の会員が中心となって始まった、倫理学、心理学、社会学など研究会や読書会の活動報告もあった。それらの例会報告は号を追うごとに増えており、広義の哲学から分化した新しい学問分野の成長過程の一端が見られる。

形式面では、初期の号は1号あたり約50ページ強の厚さで版型はA5版よりやや小さく、7冊から版型が若干大きくなる。大体の号では表紙に刊行年と号数、目次が記載されている。奥付は裏表紙にあり、本文末尾と裏表紙との間には書籍などの広告の頁が入るこ

とが多いようである。広告は本文と同じ紙質のときもあればやや薄い色紙の時もある。毎年1月の号には前年の号の目次が「目録」として収録されている。時々付録がついていたようで、井上円了が興した哲学館（東洋大学の前身）の案内や「会員名簿」、欧文哲学書の翻訳や著作の連載などが確認された。これらの付録の当時は当時、どのような形で付けられていたかは不明である。哲学館の案内のように紙片が冊子の間にはさみ込まれていたものもあったが、「会員名簿」などの付録が別冊子になっていたどうかは後述する製本の問題があり、確認することが難しい。また雑誌は月初の発行であるが、月末の例会の案内の紙片が冊子にはさみ込まれたまま保存されている場合もあり、例会と雑誌は密接に連動した関係であったと思われる。

6. 『哲学雑誌』の所蔵状況

『哲学雑誌』は現在も刊行中で、100年以上の長い歴史があるため、OPACで見ると収蔵している大学図書館は多い。しかし特に発刊当初の号を欠号なく所蔵しているところは限られる。この他、後述する製本の問題とバックナンバーの再版の問題もあり、雑誌の原状を確認するのは困難な作業であった。今回の研究にあたっては、①国会図書館本（マイクロフィッシュ版）、②青山学院大学図書館所蔵本、③立正大学図書館所蔵本、④専修大学図書館所蔵本、⑤一橋大学図書館所蔵本、⑥上智大学図書館所蔵本（以下、国会本、青山本、立正本、専修本、一橋本、上智本とよぶ）を調査した。

製本の状態は各図書館、各巻によって差異があった。例えば表紙（目次）、広告、裏表紙（奥付）、付録などを含めないもの（国会本、

立正本、専修本、一橋本）や、付録や広告の製本位置が原状とは異なると思われるもの（国会本、青山本、一橋本）もあった。翌年の付録となる1年分の目録は、多くの場合、該当の年の最初に綴じ込まれていた。表紙（目次）、広告、奥付を比較的よく保存しているのは青山本、上智本であるが、これらは初期の号に部分的に欠号がある。

初期の号は再版、再々版が行われており、それらを収蔵している図書館もあった。一橋本と上智本は4号までは再版本で、1冊1号（1887（明治20）年2月）はどちらも6版（1891（明治25）年5月発行）であった。このような再版の号では当初の版で付けられていた広告がはずされていたようである^(注5)。またこの雑誌は1巻をまとめて合本でバックナンバーの販売もされており、専修本、一橋本の一部がこれを収蔵している。合本の場合は各号の表紙の代わりに合本の表紙と、巻頭に1年分の目録が付けられ、巻末に合本の奥付が付けられていた。合本の場合も同様に広告は販売の段階ではずされていたようである。専

修本、一橋本では合本の表紙・奥付も保存されていたので合本と確認できたが、それがない場合は図書館の製本の過程で表紙や奥付が取られたのか、合本であったかは判別できない。

7. 『哲学雑誌』掲載の広告

『哲学雑誌』には、1891（明治24）年7月、1891（明治24）年9月、1892（明治25）年6月の少なくとも3回、『哲学字彙』改訂増補版の広告が掲載されており、この時期にも製本と販売が継続されていたことがうかがわれる。いずれの広告も発売所は記載されているが、発行元の記載はない。青山本・専修本によると広告の掲載内容は表2の通りである。

①は同じページに『東洋学芸雑誌』117号（1891（明治24）年6月25日発行）の広告があり、1891（明治24）年7月初旬の広告であることがわかる。②は同じページに『団報』3号（1891（明治24）年8月11日発行）の広告があり、1891（明治24）年9月初旬の広告であることがわかる。③は同じページに『史

表2 『哲学雑誌』掲載の『哲学字彙』広告

①『哲学雑誌』5冊53号（1891（明治24）年7月）掲載 哲学字彙 文学士井上哲次郎君 文学士有賀長雄君 共著 本書ハ久シク版切ノ処製本出来候ニ付広告ス 実価五十銭 郵税六銭 発売所 東京本郷哲学書院
②『哲学雑誌』5冊55号（1891（明治24）年9月）掲載 哲学字彙 全一冊 文学博士井上哲次郎 文学士有賀長雄 補訳 特別減価四十五銭 郵税六銭 発売所 東京本郷哲学書院 ^(注6)
③『哲学雑誌』7冊64号（1892（明治25）年6月）掲載（専修本による） 改訂増補哲学字彙 全一冊 付梵漢対訳仏法語彙清国音符 文学博士井上哲次郎 文学士有賀長雄 増補 該書ハ帝国大学部御版ニシテ皆革仕立金色文字入美麗無比正価一円ノ処非常減価郵税共ニ金五十銭 特別減価四十五銭 郵税六銭 発捌所 神田田代町十一番地 高橋銀次郎 本郷元富士町二番地 黒雲堂

海』12巻（1892（明治25）年5月発行）、裏面に『東洋学芸雑誌』第128号（明治25年5月25日発行）の広告がある。この広告頁は青山本では7冊70号（1892（明治25）年12月）末尾にあるが、『史海』『東洋学芸雑誌』の広告からみて専修本の7冊64号（1892（明治25）年6月）が正しい掲載箇所と考えられる。また、黒雲堂は『哲学雑誌』の大売捌所の一つとして『哲学雑誌』奥付に記載がある。

この3つの広告を見ると井上哲次郎の肩書きは文学士から文学博士に変わっているが、井上が博士となるのは1891（明治24）年8月24日である（酒井1977）ので、それを正しく反映した広告と考えられる。

8. 東洋館書店と富山房

『哲学字彙』改訂増補版を発行した東洋館書店は小野梓（1852-1886）が1883（明治16）年8月に神田小川町に開いた書店で、1886（明治19）年1月小野梓の逝去によって閉店した。その後、東洋館にいた坂本嘉治馬が、小野梓の義兄小野義眞の支援を得て1886（明治19）年3月富山房を開業したとされている（西村1935、富山房1936）。

従って、上述の3つの広告は東洋館書店が閉店したあとのものであったことがわかる。広告には発行元の記載はないが「久シク版切ノ処製本出来候」とあるので、単なる古書の販売ではないことも読みとれる。発売所に哲学書院の名前があること、井上哲次郎は哲学会の会員であったこと、井上哲次郎と有賀長雄とは井上の留学後も親交があったことが井上の日記から読みとれることから、この広告は井上円了、井上哲次郎、有賀長雄が容認していた広告と判断できる。

富山房の最初の出版物は『経済原論』（1886

（明治19）年3月）で、この本は当初、東洋館で出版準備がされていたものだという（西村1935、富山房1936）。この『経済原論』（国会図書館蔵本）の末尾には富山房の奥付があり、さらにその後ろには「東洋館書舗出版書籍目録」が掲載されていて、東洋館では出版準備ができていたものを奥付だけを差し替えたと推測できる。富山房の当時の書籍で東洋館の書籍目録がついているのは管見ではこの本のみであるが、差し替えた奥付の後ろに東洋館の目録がはずさずに付けられていることから、開業当初の富山房は、閉店した東洋館の書籍も引き継いで販売する意図があったのではないかと思われる。この「東洋館書舗出版書籍目録」には『哲学字彙』改訂増補版の広告も含まれており、その広告文は『東洋論策』（小野1885）（国会図書館蔵本）巻末の広告と同一である。

文学士 井上哲次郎先生

文学士 有賀長雄先生 合著

○哲学字彙 第二版 完一冊 正價八十錢 郵税二十六錢

右ハ嘗テ東京大学ニ於テ哲学上ノ訳語ヲ一定セシメンカ為メ印行セシ哲学字彙ヲ増補訂正セシモノニシテ哲学上ノ語類ハ一切網羅シテ遺スコトナキモノナレバ英語ニ依テ泰西ノ哲理ヲ講セント欲スル者ハ須臾モソノ座右ヲ離ナスヘカラサルノ善本ナリ加フルニ今回印行ノ字彙ハ梵漢対訳仏法語彙ヲ附録シ之ヲ第一版ニ比スレハ更ニ完美シタル所アリ以テ哲学字彙ノ大成ト称スヘキヲ知ル

（『哲学字彙』広告 『経済原論』（1886（明治19）年3月）巻末に掲載）

この広告や富山房開業のいきさつを考慮すると、東洋館が発行した改訂増補版を、東洋館が閉店したあとも販売したり、版を引き継いで増刷したりできたのは富山房の可能性が高く、その事情は当時の関係者から容認されていたと考えられる。

当時の書店は現在と異なり、出版事業、和書の新刊書・古書の販売、洋書の新刊書・古書の販売を比較的区別なく行っていたようで、富山房では出版事業傍ら、和書の販売と洋書の古書の販売を行っていた。店頭在庫がない本は近隣の同業間からその場で仕入れてその場で販売していたという（富山房1936）。そのような時代には、富山房が求めに応じて改訂増補版を増刷・販売することは、新刊書・古書の区別なく小売りをしていた書店では特別目立つことではなかったであろうし、読者にとって絶版の不便さを補う当時の有用な手段であったに違いない。

『哲学雑誌』掲載の広告は1892（明治25）年までであるが、井上の他の出版物にはその後も改訂増補版の広告と思われるものがみられる。改訂増補版から英独仏和版前後までの間の井上哲次郎の著作は、国会図書館の近代デジタルライブラリーに45点掲載されている（2009年6月現在）。この前後を含め著作のいくつかには奥付の後ろにほぼ同じ形式で「井上巽軒著述目録」が付けられており、当該の出版社以外の著作含め、価格や出版社が書き添えられている。『哲学字彙』は以下のように記載がある。

哲学字彙 一冊（『日本陽明学派之哲学』（井上1900）掲載）

哲学字彙再版 一冊 定価一円（『倫理と宗教との関係』（井上1902a）、『釈迦牟

尼伝』（井上（1902b）、『巽軒講話集初編』（井上1902c）、『菅公事蹟』（井上・田中1902）掲載）

哲学字彙 第三版 丸善 近刊（『日本学生宝鑑』（井上1904）、『日本朱子学派之哲学』（井上1905）、『倫理と教育』（井上1908）、『教育と修養』（井上1910）掲載）

哲学字彙 一冊 定価一円（『日本古学派之哲学 訂補版』（井上1915）掲載）

これらの目録は広告として掲載されたものかどうか判然としないものもあるが、中には「大倉書店発売広告」と書かれたものもあり、一応広告の一種であろう。英独仏和版（井上・元良・中島1912）が出版される8年前のものにすでに「近刊予告」がされていることから、広告掲載は井上の意向であった可能性がある。またこれらの広告から、1902（明治38）年当時でも改訂増補版が、価格が付けられて流通していた可能性がうかがわれる。

9. 改訂増補版の版種と広告との関わりについて

飛田氏の調査（2005）によれば、全国の大学等で所蔵している46冊の『哲学字彙』改訂増補版（井上・有賀1884）には、扉・奥付・奥付の朱印・背表紙の種類によって、大きく3つの版種があるという。

- ・第1種本 扉A型・奥付A型・奥付の朱印無し
- ・第2種本 扉A型・奥付A型・奥付の朱印有り・背表紙の著者名の肩書き無し
- ・第3種本 扉B型・奥付B型・奥付の朱印無し

筆者もごくわずかの範囲であるが、いくつかの改訂増補版を実見した。飛田氏が論文で

挙げられている東京大学総合図書館蔵本3冊（第1種本）、東京都立多摩図書館蔵本（第2種本）、神田外語大学蔵本（第3種本）のほか、東京学芸大学蔵本、国文学研究資料館蔵本、東洋大学蔵本である。有賀・井上の緒言から本文の最後の頁までは、3種とも文字の傾きに至るまで同一で、本文は同一の版で刷られたものと考えられる。

この東京学芸大学蔵本、国文学研究資料館蔵本、東洋大学蔵本は上記の分類の第2種本に該当すると考えられる。東京学芸大学蔵本と国文学研究資料館蔵本は東京都立多摩図書館蔵本と同じく、いずれも黒クロス装の表紙の上下の角に、革が三角に貼られており、原装と思われた。第1種本の原装とされる東京大学総合図書館蔵本にはこの革はない。また国文学研究資料館蔵本と東京都立多摩図書館蔵本には表紙の裏の角に東洋館書店の票が貼られていた。

飛田氏の研究によれば、第2種本では背表紙の著者名の上には肩書きがないが、第1種本の一部の背表紙には「文学士（行を割って）井上哲次郎 有賀長雄」と、「文学博士 井上哲次郎（改行）文学士 有賀長雄」があり、第3種本は「文学博士 井上哲次郎（改行）文学士 有賀長雄」と書かれているという。上述したように、井上が博士となるのは1891（明治24）年8月24日であるから、少なくとも文学博士の肩書きのついた本（第1種本の一部と第3種本の原装が確認できる1冊）は1891（明治24）年8月以降の装丁・発行と考えられる。

第2種本のように、奥付に東洋館の朱印があり、その一部に東洋館の票が貼られているということは、第2種本は東洋館が存在した時期に発行されたと考えられる。逆に、第1種

本の一部、少なくとも「文学博士 井上哲次郎」とあるものと第3種本は、東洋館の版を引き継いだ富山房が発行した可能性が高い。

第1種本の残りの本は「文学士井上哲次郎 有賀長雄」とあるもの（1冊）と、肩書きがないか改装のため不明で、いずれも東洋館の朱印のないものである。『哲学雑誌』の最初の広告掲載（1891（明治24）年7月）には「文学士井上哲次郎君 文学士有賀長雄君 共著」とあり、井上が文学博士となるまでわずかに時間があるので、富山房が当初発行したものがこの中に含まれているのではないかと考えられる。

東洋館書店の本の装丁については、『自由太刀余波鋭鋒 該撒奇談』（沙士比阿・坪内1884）が「其比としては高価な一円本として頗る贅沢な装丁」（坪内1932）がなされたとある。シェークスピアの著書を刊行するという思い入れの表れかもしれないが、小野梓の本へのこだわりが感じられる。このような人物が印刷の都度バラバラの装丁で『哲学字彙』を刊行したとは考えにくく、第2種本に見られるまた表紙の上下の角に革を三角に貼るという丁寧な装丁も東洋館書店の刊行の可能性を後押しするものと考えてよいであろう。

1884（明治17）年5月の改訂増補版発行から1886（明治19）年1月の東洋館閉店まではわずか1年半余りであるのに対して、書籍の広告から1902（明治38）年ごろまで改訂増補版は流通していたと思われる。第1種本と第3種本の装丁に模様の有無など多くの種類があるのも、東洋館の版を引き継いだ書店が何回かにわたって装丁を行い、長期間発行を継続していたためではないかと考えられる^{（注7）}。

10. 今後の課題

『改訂増補 哲学字彙』から『英独仏和哲学字彙』に至る周辺の資料を考察した。元良旧蔵本と思われるものには改訂作業に関わる書込があり、今後、井上旧蔵本との比較が必要であろう。井上哲次郎の「巽軒日記」には『英独仏和 哲学字彙』の準備と思われる「哲学字彙の会」の記述が繰り返しみられた。またこれ以前に、東洋館の閉店により絶版になっていた『改訂増補 哲学字彙』の増刷が行われたらしいことが『哲学雑誌』掲載の広告から判明した。

学術用語は、雑誌『太陽』や『中央公論』の調査結果でも1900年ごろにはかなり定着が進んでいるので、その前の1880年代後半から1900年ごろまでの時期が混沌から脱却し、定着が始まった時期ではないかと考えられる。『哲学雑誌』には英独仏和版の下地となった「哲学字彙稿本」が掲載されており（真田2009）、これらの資料の総合的な比較調査が用語伝播の経路の一つを明らかにすると考える。

注

- (1) 「改正増補」とする説もあるが、ここでは緒言を根拠とする飛田2005に従い「改訂増補」とする。
- (2) 「巽軒日記」のうち東京大学所蔵の84冊は、1893（明治26）年7月27日～1896（明治29）年11月11日の断続的記録1冊と、1900（明治33）年1月1日～1944（昭和19）年12月5日を半年ないしは1年ごとに1冊にまとめた83冊である。間の1896（明治29）年11月12日～1899（明治32）年12月31日分は欠落している。文京区立ふるさと歴史館所蔵（小石川図書館より移管）の3冊は、半年で1冊ずつの形で1922（大正11）年1月1日

～1923（大正12）年6月30日のものである。欠落に関しては、明治時代末の1冊が現存せず、大正時代末の2冊と太平洋戦争中の2冊が戦災で焼失（酒井1977）とされるが、「巽軒日記」1906（明治39）年7月13日条には「明治三十二年（西暦一八九九）以来日々の事件を日記に録載す」と書かれており、本来は1900（明治33）年1月1日からの日記の前に1年分の日記が存在したと考えられる。

- (3) 元良勇次郎とは家族ぐるみの交際があったようで「来訪」「書状」など多くの記述がある。ここでは、翌日共著者中島力造あてに英文序文を送っているため、元良にも井上が直接届けた可能性があると考え、表に加えた。
- (4) 7冊までは「巻」の代わりに「冊」が使われている。また、号は通し番号がふられている。
- (5) 上智本1冊2号（明治25年5月発行4版）末尾90ページには「九十一、九十二ノ両頁ハ広告ノミ故製本ノ時省キタル者ニテ脱葉ニハ非ス」とある。
- (6) 次の書籍の広告と合わせての発売所かと思われる。
- (7) 1883（明治16）年から1888（明治21）年まで米国に留学して、改訂増補版が出版された1884（明治17）年に国内に不在であった元良勇次郎が、井上哲次郎と親交があり、英独仏和版の共著者であるにもかかわらず、奥付に印のある第2種本ではなく第1種本を所蔵していた（上述）ことも、後に増刷された改訂増補版を入手したためかもしれない。

参考文献

- 天野為之（1886）『経済原論』富山房（国会図書館蔵）
- 天野為之（1932）「黎明期の富山房」富山房編『富山房』富山房、pp.15-19
- 井上哲次郎（1900）『日本陽明学派之哲学』富山房（国会図書館蔵）
- 井上哲次郎（1902a）『倫理と宗教との関係』富山房（国会図書館蔵）

明治24年版『改正増補 哲学字彙』の可能性

- 井上哲次郎 (1902b) 『釈迦牟尼伝』 文明堂 (国会図書館蔵)
- 井上哲次郎 (1902c) 『巽軒講話集初編』 博文館 (国会図書館蔵)
- 井上哲次郎 (1904) 『日本学生宝鑑』 大倉書店 (国会図書館蔵)
- 井上哲次郎 (1905) 『日本朱子学派之哲学』 富山房 (国会図書館蔵)
- 井上哲次郎 (1908) 『倫理と教育』 弘道館 (国会図書館蔵)
- 井上哲次郎 (1910) 『教育と修養』 弘道館 (国会図書館蔵)
- 井上哲次郎 (1915) 『日本古学派之哲学 訂補版』 富山房 (国会図書館蔵)
- 井上哲次郎・有賀長雄 (1884) 『改訂増補 哲学字彙』 東洋館 (1980年名著普及会刊の復刻)
- 井上哲次郎述・田中昂編 (1902) 『菅公事蹟』 東京国文社 (国会図書館蔵)
- 井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造 (1912) 『英独仏和 哲学字彙』 丸善 (1980年名著普及会刊の復刻)
- 井上哲次郎・和田垣謙三・国府寺新作・有賀長雄 (1881) 『哲学字彙』 東京大学三学部 (1980年名著普及会刊の復刻)
- 小野梓 (1885) 『東洋論策』 東洋館 (国会図書館蔵)
- 酒井豊 (1977) 「井上哲次郎の部」 東京大学百年史編集室『東京大学史料目録3 加藤弘文史料目録・井上哲次郎史料目録』 pp.13-20
- 佐藤達哉 (2002) 『日本における心理学の受容と展開』 北大路書房
- 真田治子 (2009) 「哲学字彙稿本の復元と明治24年版改訂増補哲学字彙の可能性」 第266回近代語研究会発表資料
- 沙士比阿著・坪内雄蔵訳 (1884) 『自由太刀余波鋭鋒該撒奇談』 東洋館
- 秀英舎編 (1922) 『株式会社秀英舎沿革誌』 秀英舎 (1998年ゆまに書房刊の復刻)
- 陳力衛 (2001) 『和製漢語の形成とその展開』 汲古書店
- 坪内雄蔵 (1932) 「東洋館から富山房へ」 富山房編『富山房』 富山房、pp.106-118

- 東京大学百年史編集委員会 (1986) 『東京大学百年史 部局史一』 東京大学出版会
- 西村真次 (1935) 『小野梓伝』 富山房 (1993年大空社刊の復刻)
- 飛田良文 (1979) 『哲学字彙訳語総索引』 笠間書院
- 飛田良文 (1980) 「『哲学字彙』の成立と改訂について」 『英独仏和哲学字彙 覆刻版』 名著普及会、pp.(1)-(16)
- 飛田良文 (2005) 「改訂増補哲学字彙の版種」 『日本語学の蓄積と展望』 明治書院、pp.135-149
- 富山房編 (1936) 『富山房五十年』 富山房
- 富山房編 (1932) 『富山房』 富山房
- 文京ふるさと歴史館 (2005) 「井上哲次郎旧蔵資料目録」 『文京ふるさと歴史館年報』 第7号、pp.41-63

謝辞

資料の調査に際して以下の方々のご協力を得た。「巽軒日記」の閲覧を許可して下さった東京大学史料室、同じく「巽軒日記」の閲覧を許可して下さった文京区立文京ふるさと歴史館、井上哲次郎旧蔵本を所蔵する東京都立中央図書館、『図書原簿 大正12年以前 焼残本(和書)』の閲覧を許可して下さった東京大学総合図書館に、記して感謝申し上げます。

付記

この論文は、第266回近代語研究会(題目「哲学字彙稿本の復元と明治24年版改訂増補哲学字彙の可能性」2009年9月、於二松学舎大学)の発表の一部を元に加筆したものである。また本研究の一部は日本学術振興会科学研究費(課題番号19520402・研究課題名:『哲学字彙』にみられる近代学術用語の現代日本語への定着過程の検証)の助成を得ている。